昔話の扉をひらく5　植物の命名伝承

――「誰故草」と牧野富太郎博士の「エヒメアヤメ」――

藤井佐美

二〇二三年四月から九月まで放映されたＮＨＫ朝の連続ドラマ小説「らんまん」は、植物学者牧野富太郎博士（一八六二～一九五七）がモデルでした。本稿では牧野博士による命名「エヒメアヤメ」に注目し、植物をめぐる伝承話をご紹介します。

植物情報

和名「誰故草」、「エヒメアヤメ」とも。高さ15～30㎝程度の小型のアヤメ科で、四月下旬に紫色の小花が咲く。花の中心には黄白色の斑点があり、草のような細い葉と茎で成る根茎性の多年生草本。学名は Iris rossii（アイリス・ロッシー）。種小名 rossii は、スコットランド出身のプロテスタント宣教師ジョン・ロス（一八四二～一九一五）が中国東北部の花を、イギリスの植物学者ジョン・ギルバート・ベイカー（一八三四～一九二〇）に送り届けて命名された。中国東北部と朝鮮半島の生息が報告され、日本では愛媛県のほか、岡山県、広島県、山口県、大分県、佐賀県、宮崎県などの西日本で発見されており、現在は国の天然記念物に指定され、絶滅危惧種としても注目される。株分けには適さず、蟻が種を運ぶ動物散布植物として知られる。

身近な話

○広島県の「誰故草」伝承

①『芸藩通志（げいはんつうし）』巻四十「安芸国安芸郡五」の「古蹟名勝」

大江谷（おおえたに）

船越村にあり。此谷にたれゆへ草を生す。昔大江匡房朝臣、此草を都へ取よせ、又藤原為兼卿、此国に謫居ありし時、此草を賞せられしより、草の名もつきたる由云伝ふ。其説芸文の部に載す。又一説には、大江氏の女、此谷に隠る。因て大江谷の名を得たりといふ。

②『芸藩通志』巻百四十六「芸文」

誰故草の記　作者未考

安芸国、安芸郡、海田市駅の山、十町許、わけいりて、大江谷といへるに産す、

たれ故の名は、むかし、冷泉前大納言藤原為兼卿、故ありて、此所にさすらひ給へる、春の日の徒然にたへで、そこはかとなく、山ふみし給ひ、この谷に到り給へる、折しも、弥生のはじめにて、此花の所せく、さきつゞきたるを、あかず見はやしたまひ、かゝる花の、けうとき山ふところに、たれゆえに開く、うらむらさきの、ゆかりの色には咲出るよと、つみとりて、ひたすら口ずさみ給ひしより、此草の名とせるよし語り伝へ侍る。

（割注：為兼卿、此国に左遷居たまへるころ、道全法師、尋（ママ）ね来り、題を探りてよみける歌は、風雅集旅歌部に見えたり）

大江谷、さることによれば、藤原谷などこそいふべきを、大江谷と唱来れるは、昔時大江匡房卿、大納言公任卿へ、物語の序に、安芸国なるしか〴〵の所に、花紫とも、全杜若の、いたりて小なるあり、甚愛すべきものなりと、人の語りけるよし、聞えければ、公任卿、しきりに得まほしきよしを、せめ聞え給へるにぞ、さらばとて、匡房卿、人あまた此国に、くだしてあさりもとめ給へるに、頃しも、神無月のことにて、千草も霜がれの時なれば、里人だに、いづれそれなることを見わかず、手を空しくして、帰りけるとなん、それよりこゝを名づけて、おほ江谷とよぶよし、野老のかたり伝へはべる、されば此草賞玩のことは、為兼卿より、はるかにさきにありける。たれ故の名は、此卿の口すさびよりとかや。

③『西備名区（せいびめいく）』巻三一「深津郡　宇山村」

誰故草（たれゆえぐさ）

杉谷に多くあり、花菖蒲に似て花葉ともにちさ（ママ）く、沼隈郡の内、山田山にあり、又加屋村にも

あり。是は其のむかし、いつの比にや、或人陸奥より傳を得て生立しと云ふ。山田、加屋などにあるも此處より傳へしか、しかし何れにも山澗湿地にあり。思ふに鳥など其種を喰みて、所々にひろごりしなるべし。芸州某の郷にありと云、是は上より禁して他に取せる事を免さすとぞ聞えけり。花の色しな〳〵ありと云ふ。

誰ゆへに、乱れそめ来し、花なれや、
　みちのしりへの、里ならなくに。

近比、山田の人は、おうく穿ち得て、府城の町架へひさきてければ、雅人もとめて鉢うゑなどにして楽しめり。

○愛媛県の「エヒメアヤメ」伝承

④『愛媛の伝説』

北条市の腰折山に、エヒメアヤメという小さなアヤメ科の花が自然にさく。南の地方ではめずらしい花であるため、天然記念物に指定されている。このエヒメアヤメにまつわるあわれな話は、「たれゆえそう」（だれがこの花になったのだろうかの意味）の名とともに、古くから人々に語りつがれてきている。

むかし、京のある公卿（くげ）（天皇につかえた身分の高い人）に美しいひめがいた。ひめは父親が争いに敗れたために、京から身をかくさなければならなくなった。ひめは、うばと力の強い家来一人に守られて都をはなれ、瀬戸の海ににげてきた。何日も何日も行くあてのない海の旅を続けているうちに、船は朝海本谷（あさなみほんだに）の海岸にさしかかった。朝日にかがやく砂浜、後ろにせまる山を見て、三人はここにかくれ住むことに決めた。

船をおりると、うばは、「わたしたちは人に追われている身です。人目にたたぬところへかくれたいと思っているのですが、どこかよいかくれ場所はないでしょうか。」と通りかかった村人にたずねた。村人は、ずっと向こうの腰折山を指さして、「あの山に、雨つゆのあたらないちょうどよい岩屋がありますが、オオカミがたくさんいるので、とてもきけんです。」と心配そうに言った。けれども、家来が、「オオカミぐらいおそれることはない。どうかそこに案内してくれ。」としきりにたのむので、村人は五、六人で岩屋へ案内することにした。

ひめとうばは、家来に助けられながら、足を

ひきずるようにして草のおいしげる山道を登った。村人が言ったとおり、岩屋のまわりで、うえたオオカミの群れが、今にもとびかからんばかりに、三人の様子をうかがっていた。村人たちは、岩屋に着く前にとうに山をころげるようにしてにげ帰ってしまっていた。オオカミたちは、うす暗がりの中で、目だけらんらんと光らせて、三人がすきを見せるのを待っているようだった。

家来は、ひめとうばを岩屋の中に入れると、穴の入り口で火をたき、いつオオカミがとびかかってきてもいいようにしておいた。今までのつかれが出てうとうとしかけたとき、一ぴきのオオカミが家来めがけてとびかかってきた。それが合図であるかのように、次々とオオカミがとびかかってきた。家来は必死に刀をふるって、一ぴき残らず切りふせた。その後、三人は、岩屋のそばに、すまいを建て、そこに住むことになった。村人ともだんだん親しくなった。村人たちは、美しくやさしいひめを自分たちの宝物のように大事に守り、よく世話をした。

ある日、家来が食べ物を分けてもらいに村里へ行った帰り道のことである。重い荷物を背負って歩きながら、家来はむなさわぎがしてならなかった。ふだん聞きなれているカラスの鳴き声も、なんだか不吉に思えた。家来の足はしだいに早くなった。はたして、ひめとうばは折り重なるようにして死んでいた。きっと、ひめをねらって都から追ってきた者たちが、二人を殺したのだろう。あくる日、家来は二人をていねいにほうむった。そして、本谷の里へ下り、泣く泣く村人たちにわけを話した。村人たちは、いっしょに悲しんで、家来に、「京都へは帰れないのでしたら、どうぞこの村におとどまりくださいますように。」と言った。家来も、そのことばにしたがって、ひめのねむる山に近いこの村に住むことに決めた。その後、家来は、村のむすめを妻にし、ひめのお墓をまつりながら村の子どもたちにぎょうぎ作法などを教え、しあわせな一生を送った。

いつのころからか、ひめのおはかの近くに、ちょうどひめのような、かわいいコカキツバタがさくようになった。これがエヒメアヤメだという。

伝承世界

まずは植物の名前を整理しておきます。広島県の伝承話①②③では「誰故草」と伝える花ですが、愛媛県の伝承話④では「コカキツバタ」「エヒメアヤメ」「たれゆえそう」が同一植物として伝えられています。①②③④はいずれも雅びな世界に支えられており、歴史とのかかわりから命名の由来が説き明かされています。本稿の「昔話の扉をひらく」というテーマからは少し違和感を持たれるかもしれませんが、名前の由来を語ろうとする展開は昔話によく知られるところです。この植物に関していえば、「むかし……」にはじまる小さな話が歴史にかかわる伝説的語りに寄せられています。

では、最初に広島県の伝承を確認します。江戸時代後期の儒学者頼杏坪（一七五六～一八三四）らが編纂し、文政八年（一八二五）に完成した広島藩の地誌『芸藩通志』には、「誰故草」を賞翫した大江匡房（一〇四一～一一一一）と、藤原為兼（京極為兼　一二五四～一三三二）が紹介されています。①では旧船越村の「大江谷」を概説し、別項目②「芸文」部には為兼の謫居と伝える「安芸国安芸郡海田市大江谷」を伝承地として説き明かします。そこでは、三月初旬に足を踏み入れた山奥で、美しく咲く紫色の花を見た為兼が「誰のために咲いているのだろう」と口ずさんだことが由来であると伝えます。

代表歌人藤原定家の曾孫・為兼は鎌倉時代後期の京極派歌人で『玉葉和歌集』の選者として知られますが、『芸藩通志』には為兼と道全法師との関係についても注記されており、『風雅和歌集』旅歌九三五番　道全法師の歌、

前大納言為兼安芸国に侍りけるところへたづねまかりて、題をさぐりて歌よみけるに、海山といふ事を

海やまのおもひやられしはるけさも
こゆればやすき物にぞ有りける

とあわせて、この地の歴史に思いを馳せることが可能です。為兼がたび重なる政争のために土佐国に流罪となったそう遠くない時期に、安芸国にも謫居した可能性を伝える内容は、誰故草伝承とともに郷土の歴史の一つに位置づけられています。為兼については佐渡の「遊女初君」との伝説など、他の流罪地においても歌をめぐる話が伝えられています。流罪先の動向は不明な点が多いものですが、『風雅和歌

集』の詞書は土佐国流罪からの一時的な宥免状態であったことを伝える内容であり、山奥に咲き誇る誰故草の伝承は、そのような為兼の境遇と心情を物語る内容にまとめられています。

しかし、『芸藩通志』②はその直後に、歌人で儒学者の大江匡房をめぐる誰故草伝承のほうを先例と見なします。『和漢朗詠集』の選者で知られる藤原公任（九六六～一〇四一）が匡房の話を聞いて誰故草を欲しがり、そのために匡房が安芸国へ人を遣り探させたことからこの地を「大江谷」に命名したと伝えます。結局は季節はずれで入手できなかったことを明かしますが、ここでも地名の由来は歌人ゆかりの誰故草伝承と結びついています。

さて、『芸藩通志』に続く③『西備名区』は、江戸時代後期に馬屋原重帯（一七六二～一八三六）がまとめた備後福山藩領の地誌です。同書は誰故草が多く咲く「杉谷」を宇山村（現在の福山市春日町宇山）と記し、花菖蒲に似る誰故草が咲く地として沼隈郡山田山、加屋村（福山市津之郷町加屋）の地を挙げます。さらに、その伝来を陸奥国と明かし、

誰ゆへに　乱れそめ来し、花なれや
みちのしりへの、里ならなくに

と詠みますが、これは『古今和歌集』恋歌四・七二四番　河原左大臣（源融）の歌、

みちのくの　しのぶもぢずり　たれゆゑに
みだれむと思ふ　我ならなくに

が踏まえられています。陸奥国の摺り衣の模様にように乱れる心の原因は、誰のせいでもなくあなたが原因なのですという、男性の恋歌の世界と結びつけながら誰故草が紹介されています。奥深い山の中で美しく咲く可憐で儚い「誰故草」は、和歌の歴史に寄せられた語りとともに地域に残されてきました。その伝承の背景には、この稀少な花を愛し後世に伝えようとした人々の工夫がうかがえます。

次に、④の愛媛県北条市（現松山市）腰折山の伝承話は、冒頭と末尾において三つの名前（コカキツバタ、エヒメアヤメ、誰故草）を持つ植物と伝えます。争いに敗れた公家の姫が乳母や家来と瀬戸内海へ逃げて、朝日の輝く砂浜と山を見てこの地に隠れ住むことにしました。村人は腰折山の岩屋には狼がいると教えましたが、三人は狼を追い払いながら岩屋に住み、村人も姫の世話をしていました。しかし、家来の留守中に京都からの追っ手が姫と乳母を斬り殺し、残った家来は姫を供養しました。後日、

姫の墓には「コカキツバタ」が咲くようになり、これが「エヒメアヤメ」（たれゆえそう）であると伝えます。

愛媛県松山市公式HPに公開されたエヒメアヤメの解説欄には、正岡子規（一八六七～一九〇二）の「小包にこかきつばたのしほれたる」や、幕末の伊予松山藩武士で俳人の内藤鳴雪（めいせつ）（一八四七～一九二六）の「山路来てゆかしとみしはかきつばた」のような文人が愛した花として紹介されています。また、花柳界の座敷唄「伊予節」のなかには、

伊予の松山名物名所　三津の朝市道後の湯　音に名高い五色そうめん

十六日の初桜　吉田挿し桃小かきつばた　高井の里のていれぎや

むらさき井戸や片目鮒　薄墨桜や緋のかぶら

チョイト伊予絣

とも唄われています。植物学において、「エヒメアヤメ」（アイリス・ルテニカ）は学名も異なる別物ではありますが、このような小さなアヤメ科の花が伊予文化においては腰折山伝説、俳句、芸能と結びつきながら親しまれ、長く愛されてきたことがわかります。

ところで、植物学からこの花の命名の経緯を辿ってみましょう。牧野博士は一八九九年、日本植物学会『植物学雑誌』に「五十九　本邦植物ノ新和名」として、

Iris iyoana Makino (sp.nov.) えひめあやめ（新称）予ハ之レガ標品ヲ奥平幹一氏ニ得記文ハ別ニ公ニス可シ

と報告されましたが、すでに植物学者ベイカーの報告があったことから、一九〇六年にあらためて学名「Iris Rossii」と和名「エヒメアヤメ」が報告されました。以後はその稀少性からも天然記念物に位置づけられ、一九二五年に発表された「内務省指定史蹟名勝天然紀念物一覧（其二）」にも「エヒメアヤメ」の名で登録されました。しかし、牧野博士は自身の植物図鑑では以下のように立項し解説されました。参考までに「こかきつばた」の解説文もあわせて、『牧野日本植物図鑑』からご紹介しておきます。

第 2145 圖

たれゆゑさう

一名　えひめあやめ

Iris Rossii *Baker*.

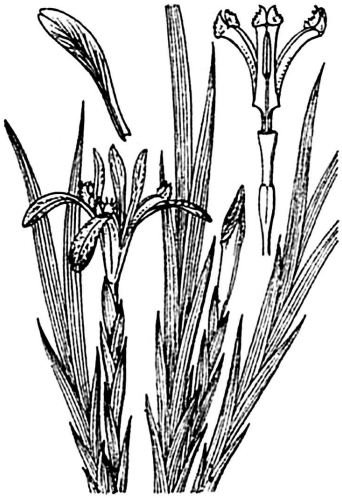
本種ノ產地ハ瀨戸內海西半ヲ圍繞スル中國・四國・北九州ニ點在スル多年生草本。根莖ハ瘠セ、疎ニ分岐シ、赤褐色ノ鞘狀葉ニテ包マレ橫行ス。葉ハ狹線形ニシテ二三箇直生シテ二列跨狀ヲ成シ、長サ15-20cm、徑1-1.5cmアリ、先端ハ尖リ綠色ナレドモ基脚ハ紅染ス。六月頃、葉間ニ短キ一花莖ヲ抽キ柄狀ノ花筒アル一花ヲ開ク、高サ葉ヨリモ低ク、苞葉二三。花ハ紫色ヲ呈シ、徑3-4cm、外花蓋片ハ楕圓形ニシテ平開シ中脈部ハ黃白色ヲ呈シ、內花蓋片ハ箆狀倒卵形ニシテ圓頭、外花蓋片ヨリ遙ニ小サク、直立ス。花柱枝モ亦紫色ヲ呈シ、先端ノ裂片ハ長卵形ヲ成ス。蒴果ハ小球形ナリ。和名誰故草ハ昔雅人ノ名ケシモノニシテ誰レ故ニ斯クハ可憐ナル花ヲ開クゾト歎美セシニ由ル。愛媛あやめハ愛媛縣伊豫ノ腰折山ニ產スル故ヲ以テ曾テ予ノ命名セシモノナリ。

○たれゆゑさう　一名　えひめあやめ　Iris Rossii Baker

本種ノ產地ハ瀨戸內海西半ヲ囲繞スル中国・四国・北九州ニ点在スル多年生草本。根茎ハ瘠セ、疎ニ分岐シ、赤褐色ノ鞘状葉ニテ包マレ横行ス。葉ハ狹線形ニシテ二三箇直生シテ二列跨状ヲ成シ、長サ15～20㎝、径1～1.5㎝アリ、先端ハ尖リ緑色ナレドモ基脚ハ紅染ス。六月頃、葉間ニ短キ一花茎ヲ抽キ柄状ノ花筒アル一花ヲ開ク、高サ葉ヨリモ低ク、苞葉二三。花ハ紫色ヲ呈シ、径3～4㎝、外花蓋片ハ楕円形ニシテ平開シ中脈部ハ黄白色ヲ呈シ、内花蓋片ハ箆状倒卵形ニシテ円頭、外花蓋片ヨリ遙ニ小サク、直立ス。花柱枝モ亦紫色ヲ呈シ、先端ノ裂片ハ長卵形ヲ成ス。蒴果ハ小球形ナリ。和名誰故草ハ昔雅人ノ名ケシモノニシテ誰レ故ニ斯クハ可憐ナル花ヲ開クゾト歎美セシニ由ル。愛媛あやめハ愛媛県伊予ノ腰折山ニ産スル故ヲ以テ曾テ予ノ命名セシモノナリ。

種番号：3548
科和名：あやめ科
化学名：Iridaceae
和名：エヒメアヤメ（タレユエソウ）
学名：Iris rossii Baker
図番号：第2145図

第2149圖



こかきつばた
Iris ruthenica *Ker-Gawl.* var. nana *Maxim.*

朝鮮滿洲支那ノ乾燥セル丘陵草原ニ生ズル多年生草本ニシテ往時我邦ニ渡來シ往々庭園ニ栽培セラルル小形ノ花草ナリ。地下莖ハ細ク分岐シ古キ毛狀ノ殘葉ヲ以テ包マル。葉ハ通常斜上シ、線形、長サ15cmニ達シ、幅4mm許。花莖ハ極メテ短ク、春日、頂ニすみれ色ノ一花又ハ二花ヲ着ク。鞘狀苞葉ハ邊緣赤色ヲ帶ブ。外花蓋三片ハ倒披針形ニシテ開出シ白色ノ網目アリ。內花蓋三片ハ狹長ナル披針形ニシテ直立ス。三岐セル花柱枝ハ花瓣樣ニシテ先端ハ二裂シ裂片ニ鋸齒アリ。蒴果ハ球形、熟スルヤ否ヤ直ニ開裂ス。種子ハ圓形。和名こかきつばたノこハ小ノ意ニシテ全草小形ナレバ斯ク云フ。
漢名　紫石蒲(蓋シ誤用)

○コかきつばた Iris ruthenica Ker-Gawl. var.nana Maxim

朝鮮滿州支那ノ乾燥セル丘陵草原ニ生ズル多年生草本ニシテ往時我邦ニ渡来シ往々庭園ニ栽培セラルル小形ノ花草ナリ。地下茎ハ細ク分岐シ古キ毛状ノ残葉ヲ以テ包マル。葉ハ通常斜上シ、線形、長サ15cmニ達シ、幅4mm許。花茎ハ極メテ短ク、春日、頂ニすみれ色ノ一花又ハ二花ヲ着ク。鞘状苞葉ハ辺縁赤色ヲ帯ブ。外花蓋三片ハ倒披針形ニシテ開出シ白色ノ網目アリ。内花蓋三片ハ狭長ナル披針形ニシテ直立ス。三岐セル花柱枝ハ花弁様ニシテ先端ハ二裂シ裂片ニ鋸歯アリ。蒴果ハ球形、熟スルヤ否ヤ直ニ開裂ス。種子ハ円形。和名こかきつばたノこハ小ノ意ニシテ全草小形ナレバ斯ク云フ。漢名　紫石蒲（蓋シ誤用）

種番号：3550
科和名：あやめ科
化学名：Iridaceae
和名：コカキツバタ
学名：Iris ruthenica Ker-Gawl.
図番号：第2149図

このように、牧野博士はその後の調査・研究に基づき、図鑑には先行する和名「たれゆゑさう」を立項されており、「エヒメアヤメ」をその一名として紹介されました。これにより「誰故草」「エヒメアヤメ」が同一植物であり、「コカキツバタ」との違いも整理されたことになります。なお、「たれゆゑさう」の解説文の末尾には、昔の雅びな人が誰のためにこのように可憐な花を咲かせるのかと歎美したことに由来すると補足されています。すなわち、その情報は腰折山の悲劇ではなく、『芸藩通志』『西備名区』の伝承話に基づく補足であったことがわかります。

松山の中学校勤務の奥平幹一氏（一八七〇～一九一〇）が、一八九七年に腰折山での採集標本を牧野博士に届けられた時点で、姫の物語がこの花と結びついていたかは不明ですが、かりにこの物語が古くから在地に語り継がれていたとしても、命名を促す印象的な語り方ではなかったのかもしれません。しかし、牧野博士の研究成果が腰折山伝説の確かな語りに結びついたのでしょうか。結果的に現在の愛媛県の伝承話には「エヒメアヤメ」「コカキツバタ」「たれゆえそう」という三つの名前が紹介されています。菩提を弔う墓に象徴的に咲いた可憐な花の話は、「だれがこの花になったのだろうか」と悲劇の主人公に対する憐憫の情を誘うとともに、花の美しさを印象づける語りとなっており、広島県の歌人伝説とは異なる魅力があります。

最後に、注目した三つの名前の認知度を振り返っておきます。見たこともない花を想像するならば、正岡子規の句や伊予節に唄われた「コカキツバタ」が（植物分類学の上では異なりますが）花のイメージに結びつきやすいといえます。それに比べ、「誰故草」は雅びで奥ゆかしい印象を与えますが花の姿を想像するには難しく、和歌説話に注目した謎解きも必要なために、記憶に残すには段階的となり少し押しが弱いように思えます。

では、牧野博士の命名された「エヒメアヤメ」はどうでしょうか。植物分類学の歴史からすると、ご紹介したとおり通名としてはこの名が知られます。私自身、日本文学とのかかわりから和歌説話に思いを寄せる雅びな「誰故草」を使いたいところですが、花の記憶に結びついた「エヒメアヤメ」を使います。結果的にこの花を観賞する際には牧野博士の名づけに導かれているわけで、花の別称を知る楽しみもそこからスタートしています。しかし、自生地

が愛媛県に限定されないことが広く知られる現代では、それぞれの場所に馴染みの別称があることも知りました。佐賀県では「雛あやめ」「姫あやめ」と呼ばれて子供が花遊びをしていたことも報告されています。あるいはここからも、小さな花を象徴する呼称というだけでなく、雅びな物語を想像することができそうです。

およそ、伝承話の新旧から命名の価値を論じたり、書承と口承の差に疑義を抱くような行為は植物観賞においては無粋といえましょう。先人のこだわりが垣間見え、観賞の手助けをしてくれる物語は、花の楽しみ方をいっそう豊かにしてくれます。この花の場合は、その名が平安時代をはじめとする文芸に支えられていることも魅力の一つといえます。

ところで、余談ですがドラマを楽しむうちに、牧野博士と縁の深かった東京大学理学部（帝国大学植物学教室）矢田部良吉博士が、民俗学者柳田国男と相婿の関係にあったことを偶然知りました。厳しい時代を生き抜かれた多くの先学の恩に、今さらながら思いを致す期間となりました。

植物を愛で、伝承を楽しむことができる平和を心から祈ります。

【引用・参考文献】

※ＵＲＬ表記資料は二〇二三年一二月閲覧。

・①『芸藩通志』巻四〇「安芸国安芸郡五」の「古蹟名勝」

・②『芸藩通志』巻一四六「芸文」

・③『西備名区』巻三一「深津郡　宇山村」（得能正通『備後叢書』第三巻所収　東洋書院、一九九〇版）

・④『愛媛の伝説』（愛媛県教育研究協議会学校図書館委員会編、株式会社日本標準　一九七七年年）

・『船越町史』（広島市役所編修　広島市合併町町史刊行会　一九八一）

・『愛媛の山草』（岸郁夫　愛媛文化双書刊行会　一九八五）

・風雅和歌集（九州大学附属図書館蔵本、ジャパンナレッジ『新編国歌大観』所収）
https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=81010V0037P0070

・古今和歌集（伊達家旧蔵本、ジャパンナレッジ『新編国歌大観』所収）
https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=81010V0001P0056

・牧野　富太郎「日本植物調査報知第十四回」（『植物学雑誌』13巻146号111頁　一八九九）
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jplantres1887/13/146/13_146_110/_pdf/-char/en
・松田　定久「理學士岡眞三君採集支那植物目録補遺」（『植物学雑誌』20巻237号235頁　一九〇六）
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jplantres1887/20/237/20_237_224/_pdf/-char/en
・内務省指定史蹟名勝天然紀念物一覧（其二）」（『地学雑誌』37巻12号　一九二五）
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jgeography1889/37/12/37_12_718/_pdf/-char/ja
・牧野富太郎『牧野日本植物圖鑑』（北隆館　東京　一九四〇）、高知県牧野記念財団・北隆館『牧野日本植物図鑑』（初版・増補版）インターネット版
https://www.makino.or.jp/fixed/?page_key=dr_makino-book
「たれゆゑそう」
http://www.hokuryukan-ns.co.jp/makino/coma1.php?no1=2145
「ゝりかきつばた」
http://www.hokuryukan-ns.co.jp/makino/coma1.php?no1=2149
・愛媛県松山市公式HP「エヒメアヤメ自生南限地帯」欄
https://www.city.matsuyama.ehime.jp/kanko/kankoguide/rekishibunka/bunkazai/kuni/ehimeayame.html
・愛媛県松山市公式HP「松山市産コケ植物目録」欄
https://www.city.matsuyama.ehime.jp/shisei/hozen/reddata.files/1100_Bryophytes.pdf
・NHKアーカイブ愛媛の民謡「伊予節」
https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0004380082_00000
・佐賀市　地域振興部　文化財課（佐賀市地域文化財データベースサイト、佐賀の歴史・文化お宝帳）
https://www.saga-otakara.jp/search/detail.html?cultureId=2947
・文化庁HP文化遺産オンライン
https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/139904

……然ラハ杉ヲ古ニマキト云ルナラン杉ヲマキト云ニ對シテ羅漢松ハ犬マキト云今ハ只マキト稱ス故實ヲ失ヘリ

西州ニハクサマキト云其臭クサケレハナリ……

ト而シテ從來本草家羅漢松ヲ取テ之レヲいぬまきニモ充ツ然レ𪜈嚴密ニ之レヲ言フ時ハ宜シク之レヲらかんまきノ漢名ト爲サヾル可ラズ

上記小野蘭山口授「物品目錄記聞」ハ世間稀有ノ一書ニシテ學友白井光太郎氏ノ珍藏スル所ナリ頃日予之レヲ借覽スルノ榮ヲ得テ以テ前記ノ如ク其名實ヲ訂スヲ得タリ此ニ以テ同氏ノ好意ヲ謝ス

○五十九 本邦植物ノ新和名

Iris iyoana Makino (sp. nov.) えひめあやめ(新稱) 予ハ之レガ標品ヲ奥平幹一氏ニ得記文ハ別ニ公ニス可シ

Senebiera pinnatifida DC. からくさがらし(新稱) 小笠原島ニ產ス

Lonicera affinis Hook. et Arn. はまにんどう(新稱)

Peucedanum sp. いしづちぼうふう(新稱) 伊豫石鎚山頂ニ產ス其學名幷ニ記文ハ更ニ別ニ報ズ可シ

○六十 こしほがまノ新學名

予ハこしほがまノ學名ヲ左ノ如ク改訂セントス

Phteirospermum japonicum (Thunb.) m.

=*Gerardia japonica* Thunb. Fl. Jap. (1784) p. 251, et Icon. pl. Jap. Decas 5 (1805), tab. X.

=*Phteirospermum chinense* Bunge in Fisch. et Mey. Ind. Sem. Hort. Petrop. I. (1835) p. 35.

○六十一 Cardamine scutata *Thunb.* トハ何ゾヤ

Cardamine scutata *Thunb.* (in Trans. Linn. Soc. II. (1794) p. 339, et Icon. pl. Jap. Decas 3, tab. IX.) ナル一

leaving the base of the leaves naked. This is said to be a character which distinguishes this species from the allied ones.

Thuja orientalis, L. (Bot. Mag. Tokyo, XX, no. 235, p. 168).—*Add*:

蘇州 (Su-chou), fr. Dec., O. no. 64. 側柏 (Pei tsu)

Hæmodoraceæ. (麥門冬科)

Liriope spicata, Lour.; F. et H., J. L. S. XXXVI, 79; *L. graminifolia,* Bak., Matsumura, Ind. Plant. Jap. vol. II, pt. 1 (1905); *Ophiopogon spicatus,* (Thunb.) Gawl. var. *gracilis,* Miq., Max. Mél. Biol. VII, 323.

蘇州 (Su-chou), fr. Dec., O. no. 72; 南京 (Nan-ching), fr., Nov., O. no. 38.

ヤブラン (麥門冬ノ一品)

Obs.—The specimen is much smaller in stature than our plant. Forb. et Hemsl. (l. c.) enumerate 5 var. of this sp., and Maxim. (l. c.), 4 var. of it. The species seems to be very variable.

Iridaceæ. (鳶尾科)

Iris Rossii, Bak.; Max. Mél. Biol. X, 714; Makino, Bot. Mag. Tokyo, XVI (1902), 151; F. et H., J. L. S. XXXVI, 83.

蘇州 (Su-chou), O. no. 261. ヒヒラアヤメ

Liliaceæ. (百合科)

Smilax sp.

南京 (Nan-ching), fr. Nov., O. no. 44.

【付記】

掲載した『植物学雑誌』は国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）が運営する電子ジャーナルプラットフォームJ-STAGE（科学技術情報発信・流通総合システム）に公開されており、公益社団法人日本植物学会に帰属する資料です。貴重な資料の引用と図版の転載についてもご許可を賜り、あらためてお礼を申し上げます。

また、高知県立牧野植物園HP上に公開されている『牧野日本植物図鑑』（牧野日本植物図鑑インターネット版）は、公益財団法人高知県牧野記念財団と株式会社北隆館（東京）により牧野富太郎生誕一五〇年記念共同事業として作成された内容で、『牧野日本植物図鑑』初版（一九四〇）と増補版（一九五六）に基づきます。解説文の引用に加え、牧野博士の精緻な図版転載のご許可とご協力を賜りました各機関にあわせてお礼を申し上げます。

なお、自生地と認定される行政機関のほかに、ゆかりのある保存会の活動内容からも多くを学ばせていただきましたことを記しておきます。

―ふじい・さみ　日本文学科教授―